坂本　一樹

一九六六年、岐阜県郡上市生まれ。一九九一年、多摩美術大学を卒業。個展やグループ展を中心に出品。二〇〇六年頃から、出来上がりを予想せずにランダムに引いた線からできる形を岩絵具で塗っていく「宙」シリーズを展開。会場では市松模様、曲線を用いた二〇一八年、丸善・丸の内ギャラリー（東京）にて個展を開催、具象の作品も発表した。

青山　一九六六年、岐阜県郡上市生まれ、多摩美術大学で日本画を学びました。卒業後、無所属で活動され、個展やグループ展を中心に作品を発表しています。現在は千葉県南房総市在住です。とても素敵なお家で、作品拝借に伺ったとき、山百合の香りがとても美しくて……

坂本　キャンプ場みたいなところで、山に囲まれていて、自然の恵みが沢山あるところです。

青山　幼いころから絵に魅かれて絵を描きたいと思うように？

坂本　みなさん同じだと思うのですが、小さいころは絵を描くことが楽しかったと思うんですね。僕も特別変わった子どもではなかったですが、絵を描くことが好きでした。中学、高校でも美術の授業が好きで、人より好きだったかはわからないですけど、美術は好きでした。

青山　美術大学に進学したいと思ったのはいつ頃？

坂本　美術大学の存在を知ったのが高校二年生くらいだったと思います。絵で大学があるんだ！じゃあそれにしようって思っちゃったんですけど。後々のことは何にも考えないで、その時のひらめきで突き進んでしまったという。

青山　周りの方は歓迎してくれましたか？

坂本　大歓迎ということはないでしょうけど、周りもこの先どういうことが待っているかが分からなかったと思うので、先生方も何とかなるんだろうと思ったんでしょうね。そんなに反対もなく、ちょっと大丈夫？くらいの感じで思われた。予備校もありますし。あまり疑問には思わなかったですね。

青山　東京や関西にいろいろな芸大がありますが、その中で多摩美術大学を選んだ理由は？

坂本　正直言って、たまたま入ったからとしか言いようがない。国立の方がよかったんですが、そちらには入れなくて、多摩美術大学に受かったので。あえて蹴って、国立にこだわることはなかったです。

青山　大学に入るときから日本画のコースを？

坂本　日本画のコースだったんですが日本画というものがどういうものか、その時は知らなかったですね。どういう画材を使うのかも知らなかったですし、入ってから教わって日本画のことを勉強し始めた。ただ受験のときから油画と日本画とに分かれていたので、そこは不思議なところなんですけど。予備校に行く時点で分かれているんですが、なぜか油絵には惹かれなくて、日本画の参考作品に惹かれました。花とか果物とかのよく見るモチーフがそっくりそのままに手にとれるように描かれていて、そ

れが面白いなと思って。二次元で手の技でそんなことができるんだ、と。それが面白くて、自分もやってみたいなと思ったんですね。

青山　学校の教育課程で、日本画の本物に触れる機会が少ないですよね。指導する先生も日本画の方は意外と少ないです。

坂本　本当に画材が少し特殊なので、取り組める人は稀だと思いますね。

青山　補足しますと、日本画はチューブに入っている絵具を気軽に使うようなものではないんです。砂のような色の粒があって、膠の液とまぜ、画家一人ひとりが絵具をつくるところから始まります。

坂本　そうですね。面倒といえば面倒です。

青山　多摩美術大学は独特の校風ですが。

坂本　他と比べられないので、こんなものなのかなとしか思わなかったですけど、割と自由に、勝手にやれという感じだったと思います。

青山　今回の出品作家には多摩美術大学出身の方が多く、先輩・後輩の方もいらっしゃいます。例えば新恵さんは学校でお知り合いになったりは？

坂本　卒業してからですね。学年としてはギリギリ重なったかどうかぐらいで。絵描き同士仲良くするというより自分の作品という感じなので。

青山　卒業後、無所属を選ばれたのは自分ひとりでやっていきたいという思いがあったのですか？

坂本　そうじゃないですね。最初はお世話になっていた先生との関係もあって、日展に挑戦はしたんですけど、どうも合わなくて。団体展を見に行っても、自分がいいと思わない絵が飾ってあったり、自分も出品しても入らないし。自分ではいいと思っているのに落ちたりすると、ダメなものとレッテルを貼られるようでそれが寂しかった。ちょっとだけやって、そこからはもう、自分だけでやっていこうと思いました。

青山　卒業後の制作のテーマが動物でしたね。

坂本　最初のころはそうでしたね。

青山　動物を描きたいというのは何かきっかけが？

坂本　最初は課題からでした。どこの大学でも画材に慣れるために花や人物、動物と課題があって、課題をこなしていくうちに自分のテーマを見つけていきます。動物を描くときに大学の近くにあった、日野市の多摩動物公園で見たアフリカの動物がすごくおもしろいなと。形とか大きさとか色合いの不思議さ、こんなのが生きているんだと。子どものころよりも、大人になってから見たほうがより不思議さ、面白さを感じました。日本の武蔵野の山の中にキリンがいるというのはすごくコントラストがあって、面白いと思ったんですね。それをしばらく描いてから、今度は本物を見てみたいとケニアまで行ったり、数年間は動物を描く事に集中していました。それは生きているという事そのものの生命感や地球の不思議さの象徴としてアフリカの動物を描いていたのだと思うんですね。それが結構長い間続きました。

青山　そこから「宙（SORA）」シリーズが生まれるきっかけは？

坂本　動物を描いていた頃はそれはそれで夢中でおもしろいと思っていましたけど、少し冷静になって見渡してみると、他にもやっている人はいるんですね。象やキリンを描いている人はいるし、テレビでは珍しい動物も映る。写真でやっている人もいる。

その中で自分がそっくりに動物を描く理由って何か考えたときに悩みだしてしまって。しばらくは続けていたんですけど、最後は行き詰って何とかしないとな、と。日本画の画材も使うことが苦しくなった時期があって、どうしようと。その時に絵を描く事って、小さいころはもっと楽しく描いていたよなーって。三、四歳のころは車や電車をクレパスで一生懸命塗りこんで、きれいな色が出たらそれが嬉しくて。隣の子が分厚くしていたら、俺の方がもっと分厚く塗ってやるってそういう楽しみがあったと思うんですが、それをいつの間にか忘れている。あの頃の気持ちにもう一度戻りたいと思って。

ある時、十五年前くらいだと思うんですが、日本画の画材やモチーフを一旦横に置いておいて、無垢な頃の自分に戻ってみようと。とりあえず一枚の紙にいくつか線を引いてみると、そこに形ができます。その模様とも何とも言いようのないできた形に子どものころ使っていたサクラのクレパスで塗り込むということをやりだしたんです。こういう感じだったなと思いだせるようになりました。振り返ってそれを見たら一応形になったぞ、しばらくやってみようと。その時出来上った、作品と呼んでいいものかどうか分からないものを思い切って銀座の画廊に展示しちゃったんですよ。その時、画廊のオーナーは僕が動物の絵を出してくると思っていたらしく、僕がこういうのを出したいと言ったら、半分怒っていましたね。でも僕はこれでやるんですって押し通して、結局はそれを展示したんです。動物を期待した人はえ！ってちょっとがっかりした人もいるんですけど、初めて見た人はそれが始まりだから、絵を通してコミュニケーションできたんですね。おもしろいねとか、こういう風に見えるねとか。こういう絵画の表現の仕方もあるんだってそこで知りました。その時はまだクレパスだけの展示だったんですが、それを岩絵具でやってみようという展開でしたね。これが本当に最初の最初。

青山　タイトルに《The Beginning》、始まりとあるので、まさにこれが出発点だと思っていました。

坂本　これはクレパスの作業の中では集大成的なもので、もっと小さい作品を描いていました。百号あるので、結構手間が掛かっています。最初の銀座の画廊で展示したのはこれです。

青山　私はこの作品を初めて見たときに色が目に入ってきて、色そのものを純粋に楽しむ感じがして、すごくワクワクする気持ちになりました。初めて見た人の中には、そのような気持ちを共有できる人もいるのではないでしょうか。

坂本　そういう風に見てくださったらいいなと思ってやっていました。先ず、まっさらな画用紙に出来上がりを予想しないで、適当に、手が動くに任せて鉛筆で線を引きます。どの作品もそうなのですが、途中で一回も消しません。この線変だから消そうとはしなくて、できた線はすべてそのまま取っておいて、線の中にできた形に塗り込んでいく。塗り込み終わったところから白で消していったり、こすったり、そういう絵の作り方をしています。なので、何も見ないでここまで来ているので、素の自分かなと思っています。具体的な動物や花ではないけれど、観て下さる方に何かを感じてもらえれば自分でもやってよかったと思えるし、それが自分でも楽しいと思ってやっています。

青山　岩絵具の仕事になったときに「宙」という共通のタイトルをつけてシリーズ化しましたよね。宇宙のイメージが作品に重なっているということでしょうか？

坂本　そうですね。宇宙というと、それこそスペースシャトルやロケットに乗らないと宇宙に行けないと大概の方が思っておられると思いますけど、そうじゃなくて、今ここで呼吸している地上もイコール宇宙なんですよね。それにある時気付いたんです。これ（《The Beginning》）を描いた時、クレパスでやっていた時にはまだそんなに気づいていなかったです。その後、南房総に引っ越ししたのですが、暮す場所を決めるときに、タイミング的に勤め人じゃなくなったのでどこで暮らしてもいい、ということになって、じゃあ気持ちいいところに暮らそうと思いました。コストがかからない田舎に行っちゃおうと。千葉の山の中、キャンプ場みたいなところに。繰り返しになりますが、子どものころから虫が好きだったり、魚が好きだったり、自然の中で遊ぶというのが大好きだったんですね。だからどこに暮らしてもいいよと言われたら自然の多いところで暮らしたいと思っちゃったんですけど。僕はたまたまそんな感じで行ったところが南房総だったんです。そこでは聞こえるのが風の音、虫の音、木々が揺れる音で、見るものほとんどすべてがグリーン。空気もいいですし、星も綺麗、そんなの見ていると小さな蔓がくるくると丸くなっているのも綺麗だなと思ったり。そういうのが自分の絵にもちらちら見えているんじゃないかな、とある時気付いて。こじつけじゃないけど、自分はこれを描いていたんじゃないかなと思うようになって。写真みたいに描くのが、絵じゃなくて、おおざっぱだけど、作品の中に見える形も植物の蔓だと見立ててもいいんだなと思ったり。大きくいって、宇宙の一部と考えるようになって、「宙」シリーズとするようにしたんです。アフリカの動物すごいなと思っていたんですけど、うちの近所にもアナグマとかいるし、日本も負けてないなと。遠い外国に行かなくてもここら辺でも探せばいろんな不思議なものっていっぱいあると思うんですね。アフリカの国立公園に行かなくても、十分楽しめると思っています。

青山　植物の蔓のような形から、二〇〇九年の作品のように抽象的な形に変わってきたのはきっかけが？

坂本　やっていることは最初から変わっていません。縦横に線を引く市松で描くスタイルと曲線で描くスタイル、おおざっぱに二種類あります。市松だとフリーハンドではあるけれども、隣の線に当たらないように線を引いています。一方で手が動くままに自由に線を引くという曲線タイプもあります。線と線で囲まれてできた形に絵具を重ねて行って、部分的に箔を貼り、けずって白い絵具をかけたり、結構重層的になっています。自分の感覚で心地いい色と形が出てくるように絵と相談しながら描いています。けずっているのも絵と相談しながらでてくる感じです。色は赤とか青とか入ってくるけど、目立つ色が主役ではなく、逆に白も脇役でなく、主役でもある。

青山　白がただの白ではなく、赤や金が奥に隠された白だったり、白の表情がすごく複雑です。印刷ではそのニュアンスが消えてしまった。実際の作品の前に立つと、日本画の画材が持っている粒子の美しさがわかる。

坂本　印刷は毎回悩みます。白は日本画の特徴的な色で、胡粉といいますが、自分でも気に入っていて、その使い方の研究を常にしているところ。胡粉の使い方には結構こだわりがあって、そちらを見ていただきたいと自分では思っています。

青山　色の重なりをぜひ見てほしいと思います。全体として、具体的な形を表現しているわけではないけど、このように画材の発色が美しい作品はあまり見たことがない。多くの作品は色をどんどん重ねていくので、にごってしまう。一つ一つの発色は美しいのに、どうしてこんなににごらせるのだろうと思うことがあるのですが、坂本さんの作品は重ねても一つ一つの色が目に飛び込んでくるような気がします。そこは意識していますか？

坂本　動物を描いていたころは動物を描くために絵具を殺すというか、立体感とか空間、奥行きを出すために絵具が悲鳴を上げるというか、せっかくの材料を無視するところがあるんですよ。それに悩みはありました。日本画の材料でなくても木炭とか使えばいいと思っていた時期もありました。今は画材がせっかくきれいなんだから、それを活かそうと思っています。

青山　先日、民放のテレビドラマの一シーンに作品が映りましたが、一目で坂本先生の作品とわかるのはすごい。

坂本　市松は誰でもできるが、だからこそ誰も同じ絵にはならない。それが強みだと、そこに気づいたのはラッキーだったと今では思います。《宙—IN BLUE》は自分でも気に入っています。

青山　対照的な色の使い方が効果的です。

坂本　やっていることは最初のクレパスで描いた絵と変わらないです。線を引く時に手が動くにまかせて、あまり考えないでできるだけ無心で。絵描きってどうしても考えてしまうんですね。いい絵描かなきゃとか、今度何描こうとか。何か入賞してやろうとか。そんなことばっかり考えてしまうんですよ。僕だけかもしれませんが。それを取っ払って、無心で、どうなるかわからないけど、というような。精神的に落ち着いた状態で線を引くことに集中して、一点一点やっているのですが。ともかくまっさらな和紙に線をすーっと引くことから始まる。縦、横、丸とか。最近の作品になってくると、線自体もだんだん密度が濃くなっていって、すごく細かい形になっていく。一個一個にパズルのように色が入っているんです。細かいところにも箔を貼って削って、箔の種類も変えていたり、遠くからぱっと見じゃわからないですけど、そばでじっくり時間かけて見ていただくと色々見えてくるかと思います。青が綺麗と言っていただいていますが、白がポイントなんですね。他の色が全部綺麗に見えるには、白が綺麗じゃないとだめだと自分では思っています。白い形の下には金箔を貼ってあって、その上に何度も胡粉をかけていって、白が目立つようにしてある。青いところには日本の伝統的な色の群青という色を使っています。岩を砕いた青い絵具の、胡粉と同じぐらい細かい白群を何回も何回も、牛乳ぐらいに溶いた白群を何度も何度も重ねて、色を出しています。タイトルのIN BLUEはそんなに深い意味はないんですけど、青が基調になっているので。ガーシュインの「ラプソディー・イン・ブルー」から生まれました。

青山　ジャズをベースにしたクラシックですよね。お宅に作品を借りにうかがった時、ジャズが流れていて、お好きなんだなと思いました。

坂本　音楽が好きで色々なジャンルを聞きます。アフリカ音楽や民族音楽など。音楽家にすごく憧れていて、音楽ができたらどれだけ素敵かと思いますけど。音楽って抽

象ですよね。全部。色々な風景や感情を聴く人に感じさせる。そういうのに本当に憧れますね。自分にできるのは平面に絵を描くことなので、音楽のように何かを感じていただきたいなという思いで描いています。

青山　音楽というのは、私の中ですごく腑に落ちました。

坂本　平面で音楽をやりたい。

青山　「日本画の逆襲」というタイトルでお声がけした時にはどう思いましたか？

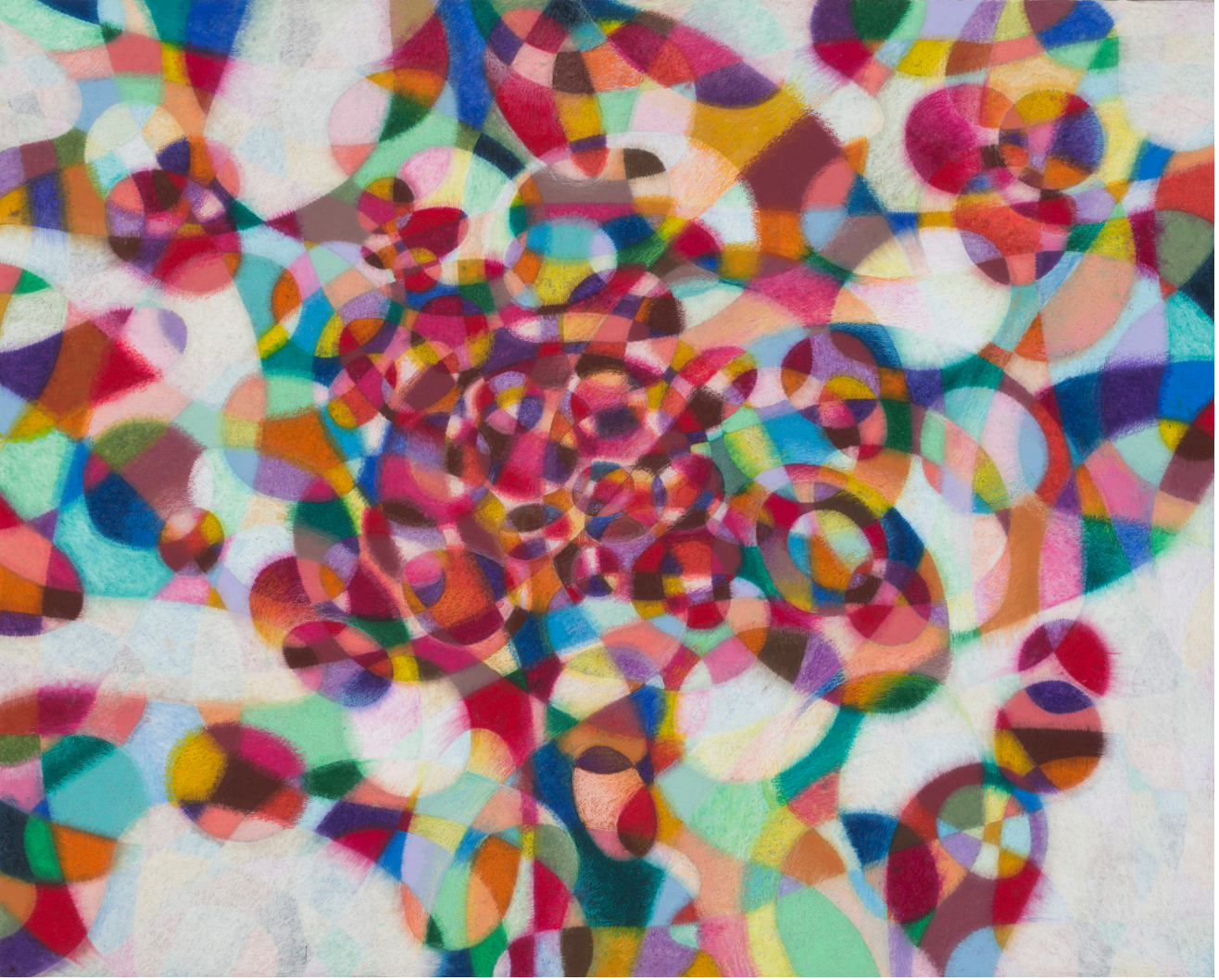
坂本　諸手を上げて喜びました。とうとうこういうところに飾ってもらえると。生まれも岐阜県なので、本当に良かったなと思っています。

青山　「逆襲」という言葉を変に思いませんでしたか？

坂本　普段は逆襲とは全然思ってないです。日本画の学校を出て、日本画という画材を使っているけれど、日本画をやっているとはあまり意識してないです。外国の方に日本画と言っても誰もわからないわけですし。せっかく世界に通じる「絵画」という国境のない世界で表現していくわけだから、何も日本画という呼び方にこだわりは持ってないです。あえてこういう展覧会に呼んでいただいたのは、タイトルをつけた方が日本画というジャンルの中に何かアンチのようなものを感じているのかなと、そこに使っていただけて本当にうれしいと思っています。

青山　日本画の展覧会というと、「横山大観出ますか？」と聞かれます。大観は確かにいい作家だけど、現代にもいい作家はたくさんいる。でも現代美術好きの人には「ああ日本画ね」と流されてしまう。日本画だって現代の日本画は現代美術でしょうと思う。日本画担当として、現状に物申したいと思うことを「逆襲」に込めています。今後やってみたいことや近々の予定があったら教えてください。

坂本　無所属でやっているので、個展を開いて発表していくしか道はありません。九月に埼玉で個展を予定しています。その後一月にメディアコスモス（岐阜市）で展示を予定しています。ともかく展示を多くしていくしかないと思います。絵の内容については、僕は不器用なタイプで色々なことはできないので、こんな感じでやっていくしかないんですけど、それでも、誰も見たことのない絵、自分も見たことのない絵を描いていきたいと思います。抽象的に見えるのですが、自分としては花鳥風月だと思っているんですね。自然が大好きなので、宇宙も含めた全部、鉱物も好きなんですけど、瑪瑙（めのう）とか化石とかを不思議だと思ったり、そういうものを含めた自然が好きなので、そういうものを讃えたい。自分の表現は花鳥風月だと思っています。そういう姿勢は変えようがなく、自然賛歌のようなことしかできないので、そういう思いでこれからもやっていきたいです。



坂本一樹《The Beginning》
二〇〇五年